

『エッセー』における増補修正の もうひとつの意義

奥村真理子

モンテーニュは死に至るまで『エッセー』への増補修正を続けた。そのため思想はより明確に表現され、初版では書籍的・非個人的だった幾つかの章も個性的魅力を備えるようになった。しかし逆に、思想的に重要性のない詳細や、装飾的にすぎぬ引用などによって、無秩序と当時流行していた銜学趣味に陥っており、これは特に1588年以後の増補に著しい、とヴィレーは判断している。¹⁾ ヴィレーの銜学趣味追従説は、寺迫氏が事例蒐集に関して異論を唱えているとおり、²⁾ 疑問視されるべきだろう。事例蒐集に限らず他の種類の増補修正に関しても、ヴィレーにはひとつの観点が欠けていたように思われる。それは、彼が各章の詳細な源泉考察の結果若干の例外を認めているにもかかわらず、『エッセー』の章の配列順序の基準を執筆年代順として、³⁾ モンテーニュ自身が決定した章の配列の別の意味、すなわち隣り合う章同士の関係をほとんど配慮しなかったことに由来する。⁴⁾

これに対しセイス氏は隣り合う章の関連性を指摘し、章の配列に執筆年代以外の意図を見出している。⁵⁾ メージェ氏も、章の配列が執筆年代順であるとしても、厳密に書かれた順序に従っているかどうか確かではない、との確な判断をし、セイス氏が発見できなかった数章の関係のうち幾つかを明らかにしている。⁶⁾

ところで、メージェ氏は第Ⅱ巻第19章の隣り合う章との関係及びこの章の意味を検討する際、第Ⅲ巻第10章になされた後年の増補がこれを明らかにすることを述べている。⁷⁾ それならば、別の箇所にはなく同じ箇所に施された増補修正もまた、隣り合う章の関係を示していると考えられるのではないだろうか。そこで、『エッセー』の中で章同士の関係がこれまで指摘されていない、したがって最も目立たぬ部分から例を採ることにしよう。

*
**

第 I 卷第 54 章「つまらぬ器用さについて」の冒頭で、モンテーニュはつまらぬ器用さで評判を得ようとする人を批判し、またそのような無価値なものを新奇さや難しさの故に推奨するのは判断力が弱い証拠だと述べる。これに続いて、物の両極端を兼ねず言葉を探す遊びをした話が語られ、両極と中間が対立する例が集められる。初版では 10 例だったが後年の加筆でその数は更に増え、1595 年版ではこの章は初版の約二倍になっている。モンテーニュはなぜこのように同様の例を集め続けたのだろうか。その第一の理由は章の最後の文章が示している。

けれども、よくあるように、一度、精神に道が開けてしまうと、全然そうでないものを、いままで、むずかしい仕事だの珍しい事物だのと思い込んでいたことがわかったし、一度われわれの想像に調子がついてしまうと、同じような実例がいくらでも見つかるということもわかった……………

(I, 54, p. 300, a)⁸⁾

モンテーニュがこの章の実例をさらに増やしたのは、それによって、この文章に述べられている、一見難しく珍らしく思われる事柄も容易に同様の例が見つかるということ、読者に一層実感させるためなのである。すなわち、精神や想像力について理屈を述べた代わりに、多くの同様の例の列挙という実例で示そうとしているのである。しかも、後年加えられた例の大部分は単なる例にとどまらず、人間についての考察にまでなり得ている。そのような例は初版でも見られたが、後年の増補例がそれを増大させるのである。そして、それらは章の後半に置かれている。従って、読者は単なる言葉探しの遊びから人間考察へと進むことになる。これによって、上に引用した連想の効果を述べる文章はより説得力を増すのである。

他方、後で示すように、この章に増補された例にはこの章とこれに続く諸章との関係を補強しているものもある。しかし、上に引用した文が実例の増補によってその正当性が強調されていること自体が、この章とこれに続く諸章との関係を更に強く示唆しているという事実にも注意をはらう必要があるだろう。

この第 I 卷第 54 章から第 57 章までをセイス氏は章同士の関係が見出せない箇

所のひとつとしている。⁹⁾だが、これらの章の関係も上に引用した文が示唆している。第55章～第57章も第54章で集められた両極と中間の対立の例であり、こうした同様の例の連続によって、上記の文章で述べられた連想の効果を証拠立てているのである。第55章「匂いについて」：稀有な体質の汗の芳香と普通の体質の無臭（両極）は後者の匂い（中間）より優れている。第56章「祈りについて」：敬虔に祈るのでなければ祈るべきでなく（両極）、不敬に体裁だけで祈るべきではない（中間）。第57章「年齢について」：幼年と老年（両極）は20～30歳（中間）に肉体的・精神的に劣る。ただし、どの章も両極対中間を言葉にしている訳ではない。内容によって知るのみである。だが、手掛りがもうひとつ与えられている。第54章の初版における最後から二番目の例である。

幼年と老衰は頭脳の弱い点で一致する。

(*ibid.*, p. 299, a)

これは第57章「年齢について」に結びつく。それによって第54章と第57章の隔たりが埋めあわせられているのである。また、両極と中間の対立という共通点に気付かず、第55章と第56章を読んだ読者は、第57章でこの文を連想して第54章の内容を想起すれば、他の二章も同様ではないかと考えて、共通点に気付くかもしれない。

このように連想の効果が同様の例の連続という実例で示されているのは、それが『エッセー』における人間及び自己の研究に深く関わるからである。第Ⅰ巻第53章でモンテーニュはこう語る。我々が、他人の欠点や我々と無関係な事物ではなく、我々自身を探るなら、「われわれの組織全体が、いかに弱く不完全な部分から出来上がっているかを、容易に思い知るだろう」（Ⅰ, 53, p. 296 a）。続いて、第54～57章で実例を示しながら暗に語る。今（第53章で）述べた我々の弱さ・不完全さを示す例は、珍しく見つけ難く思われるかもしれない。だが、つまらぬ器用さを身につけようとしたりするかわりに、我々自身を探っていれば、精神に道が開け、想像に調子がつき、我々の弱さ・不完全さを示す実例も容易に幾つでも見つかるのだ。だから、と第Ⅱ巻第1章に続く、人間の諸行為の矛盾についても、

世間にはこういう例がいっぱいにある。いや、誰でもこういう実例を自分の中にいくらでも見いだすことができる。(Ⅱ, 1, p. 315, a)

こうして『エッセー』で重要な役割を演じている思考法、すなわちドレスデン氏が指摘する「一連の連想による思考法」で、「数多の実例の助けを借りて」¹⁰⁾判断し、示すやり方を、実例で示しているのである。このように、諸章のつながりにはモンテーニュの意図が託されているのである。

*
**

なるほどメーজে氏の指摘するとおり¹¹⁾、初版においても目立たなかった章同士の関係は、相次ぐ増補によって一層目立たなくなっている。「つまらぬ器用さについて」の例が豊富になることはすでに述べたとおりである。それだけでは貧弱で読者の注意を惹き付けられない「匂いについて」には、著者の若い頃のなまめかしい思い出など、匂いに関する他の叙述が加えられる。「祈りについて」はローマ法王庁で戒告を受け¹²⁾、弁明文が冒頭に加えられ、モンテーニュのカトリック教徒たる敬虔さも表現されるが、宗教に関する論もさらに展開される。しかし、章同士の関係も増補修正によって補強されている。

すでに前半だけを引用した「つまらぬ器用さについて」の最後の文章の後半は、初版では次のようになっていた。

「このエッセーが人々の判断に値するとしても、私の考えでは、粗雑で無知な人々にも、鋭敏で博識な人々にも、あまり喜ばれそうにないと思う。前者には十分にわからないだろうし、後者にはわかりすぎるだろうから。このエッセーはこれら二つの端の間に居所を見つけるだろう。」(D. M., I,¹³⁾ 54, p. 480)

この文中の「粗雑で無知な」と「鋭敏で博識な」¹⁴⁾は1582年版で「一般の俗衆」と「稀有なすぐれた」¹⁵⁾に変えられる。この方が更に後になってモンテーニュが高らかに称える「無知の知」にとっても不都合がないだろう。初版でも、この章や「レーモン・スポンの弁護」に、この思想の萌芽である、単純で無知な者は不幸を感じないという認識は見られる。しかし、それはともかく、ここで選ばれている言葉は、この章に続く第55章の冒頭で用いられている言葉によって

決定されていると考えられる。

ある人々の汗は〔…〕ある種の稀有な体質のために、芳香を発したと言われている〔…〕しかし、普通の体質はこの反対で、何も匂いのしないのがもっともよい状態である。（I・55, p・300, a）

前章の「一般の俗衆」, 「稀有なすぐれた」はこの章の「普通の（一般の）」, 「稀有な」¹⁶⁾に呼応しているのである。

「つまらぬ器用さについて」に1588年版で加えられた両極対中間の実例の一つは、第55章・第56章に増補される文と結びつく。これによって、第54章～第56章のつながりは補強されている。従って実例の増加だけが目的ではない。

好奇心も少なく教育もあまりない単純な人々からは、善良なキリスト教徒が生まれる。彼らは尊敬と服従によって、単純に信仰し、教義を信奉する。中程度の知力と能力の人々からは誤った思想が生まれる。彼らは最初に感じたもっともらしい意味を信じて、宗教の教育を受けたことのないわれわれが古い習慣を墨守するのを見て、これを単純愚昧と片づけて正しいことのように思っている。偉大な精神の人々はずっと落ちついて明敏であるから、単純な人々とは別な意味で、立派な信者となる。この人々は長い間の敬虔な研究によって、聖書の中のいっそう深遠玄妙な光を洞察し、われわれの教会の組織の神秘で神聖な秘密を悟る……（I, 54, p. 299, b）

この文章は言うまでもなく宗教を扱った「祈りについて」につながる。だが、それだけではない。さらにこの文章の行間には次のような考えが読み取られる。すなわち、聖書の研究は偉大な精神の人が敬虔に取り組んで初めてできるもので、誰にでもできるものではないし、能力の足りない者が安易にすることは大変危険であるからすべきではない、ということである。この考えは「祈りについて」に同じく1588年版で挿入された次のような考えの根本ともなっている。1) 聖書は「広間や台所でぺちゃくちゃ論議」して「片手間に、騒々しく取り扱ってはならない」（I, 56, p. 306, b）。2) 聖書の多くの国語への翻訳はきわめて危険だ。なぜなら聖書の言葉の解釈は困難で重大で、それのできる十分な

判断力を持つ人が各地域に必ずいるとは限らないから。3) 神学は敬虔になされるべきで、人文学的考察と一緒にしたり、芝居・娯楽・見世物の題材にすべきでない。4) 「宗教を公然と職業とする人以外は、宗教を語るのにきわめて慎重でなければならぬという掟」も「私に口を出すなという掟」も恐らく当然、「ある程度、有益で正当である」(*ibid.*, p. 309, b)。

さらに1595年版には、偉大な精神で敬虔に神学をする人とただ単純に信仰する人は良き信者になるが、その中間の人は悪しき信者になる、という第54章中の上に引用した文章とまさしく呼応する増補が第56章になされており、二章の関係がより強くなっている。

これ〔神学〕は誰にでもできる学問ではない。神様から召されてそこに身を捧げた人々のための学問である。邪悪な者や無知な者は、この学問をするとかえて悪くなる。〔…〕純粹な、すべてを他人に任せきった無知のほうが、あの思い上りと向う見ずを育てる口先だけの空虚な知識よりも、はるかに有益で賢明だったのである。(*ibid.*, p. 306, c)

ところで、この二章に挟まれた第55章「匂いについて」に対して1588年版でなされる増補の中に次のような文がある。

教会で香を使う思いつきは〔…〕われわれの感覚を喜ばせ、刺激し、浄化して、冥想にふさわしい状態にするためのものだそうで、私もなるほどと思う。(I, 55, p. 302, b)

この文は、先に引用した第54章への増補文と同様、宗教を扱っているばかりでなく、望ましい信仰の姿を表現している。そのことが、第55章と第54章をいっそう結びつけている。さらにまた、この文は神に祈りを捧げる時の心の浄化を重視していることによって、次の「祈りについて」に結びつけてもいる。したがって、両極と中間の対立という共通点以外によるつながりも作られているのである。

初版においてもこれは見られる。第55章「匂いについて」では、舶来の香料を使用している人に対して、それが生まれつきの欠陥を隠すためではないか、

という疑いが述べられている。これは第56章では不敬な心の祈りによる偽装への疑いに引き継がれる。この偽装という、第55～56章のつながりもまた、補強されていく。第56章には1588年版で次のようなラテン語詩句が引用される。

もしも、夜に姦通をおこなう者が、サントネス人の頭巾で顔を被うならば。
(I, 56, p. 304, b)

ラテン語詩を自在に引用できるモンテーニュがとりわけこの詩句を選んだのは、ここで用いられている動詞「被う」¹⁷⁾が、前章で彼がすでに用いていた動詞「隠す(被う)」¹⁸⁾と結びつくからではないだろうか。この詩が単に装飾のために引用されているとは言い難いのではないだろうか。1595年版では、同じく偽装を批判しながら更に直接的に前章「匂いについて」との関係の補強がなされている。

彼らがわれわれの前に装うあまりにも急激な思想の矛盾と変更は、私には奇蹟の匂いがする。(I, 56, p. 305, c)

特に「匂いがする」¹⁹⁾は、これがモンテーニュが好んで用いる動詞のひとつであることを考慮に入れても、明らかに前章「匂いについて」²⁰⁾を意識して用いられていると考えられる。

第57章「年齢について」への増補は多くはないが、いずれも第54章で示された、この章に結びつく幼年と老年対中間の年齢の対立に関わり、この章の他の言及事項に関する増補が見られないことは注目すべきだろう。なかでも、初版ではこの章で使われていなかった「頭脳(脳漿)」²¹⁾という言葉が増補文中に見られる。これは、明らかに、第54章中でこの章を示唆した文「幼年と老衰は頭脳の弱い点で一致する。」(I, 54, p. 299, a)の「頭脳(脳髓)」²²⁾という言葉を意識したものであろう。²³⁾



このように意識的に、隣り合う章同士の関係は増補によって補強されているのである。しかし、モンテーニュは諸章の関係を直接読者に告げるのではなく、テキストを介して理解されるようにしている。この姿勢は、初版、1588年版、

1595年版と一貫している。「言葉」について語る彼の言葉を、年代順に引用しよう。

私は継ぎ目や縫い目が現われて見える織物を好みません。ちょうど美しい肉体において骨や血管が数えられるようになってはならないのと同じです。
(I, 26, p. 171, a)

私は内容がひとりでに誰にも明らかにわかるものであってほしいと思う。そのどこが変わり目か、どこが結び目か、どこが始まりか、どこで話が元に戻るかということが、弱く不注意な耳のために連結する言葉を挿しなくとも、十分にわかるものであってほしいと思う。(III, 9, p. 974, b)

私の主題を見失うのは不注意な読者であって、私ではない。そこにはたとえどんなに押しつけられても、どこかの隅に、十分な言葉が見つかるだろう。(*ibid.*, p. 973, c)

こうした文章表現における彼の美学が、諸章の関係をさりげなく補強する増補修正にも反映されているのである。もっとも、第I巻第25章と第26章、同巻第39章と第40章など、つながりを敢えて言葉で言い表わしている箇所も稀²⁴⁾にある。しかしこれは、それによって他の諸章もつながっていることを読者に示唆しようとするものではないだろうか。

だが、あまりにも「弱く不注意な耳のために連結する言葉」を避けるために、章同士の関係がほとんど分からなくなってしまうことがある。第II巻第8章と第9章がそうである。これもセイス氏が関係を見出せない⁹⁾と述べた部分だが、それはある一節の削除が原因である。

第II巻第8章「父の子供に対する愛情について」の内容は題名の示すとおりだが、最後の部分は精神によって生み出された子供である作品への著者の愛情について書かれている。著者の作品への愛情の正当性と強さが、先に述べられた肉体の子供への愛情より勝るものであるとされ、子供よりも作品を失う方を堪え難いと思った人々が列挙されるのである。続く第II巻第9章「パルティア

人の武器について」は、古今の武具について述べながら、古代の戦士に比べ情弱な同時代の貴族を批判している。さて、この章から1595年版で削除されてしまった一節を全部ではないが引用しよう。

…かつて私は我々の武器とローマ人の武器の比較について知っていることを詳しく書いたことがある。しかしその原稿は他の数篇と一緒に、私に仕えていた男に盗まれてしまった。私は彼が盗んだ原稿から得たいと思っている利益を奪うつもりはない。それに同じ肉を二度も咀嚼するのは〔同じ題材を二度も扱うのは〕²⁵⁾難しい。(D.M., II, 9, pp. 96-97)

したがって、この章は同時代の貴族の情弱さの批判であるとともに、子供を失うより作品を失う方がつらいと思った著者たちを描いた前章の後半の続きであり、現代とローマの武器比較論という精神の子供を失ったモンテーニュの哀惜の表現なのである。

さて、この一節が1595年版で削除されたことで、今述べた二章の関係は完全に消されてしまったのだろうか。ここだけを読む限りではそうかもしれない。しかし、他の章が遠くから示唆している。第I巻第48章「軍馬について」には、古今の武器比較論を予告した言葉が削除されずに残っている。

けれども、銃器のことについては、あとで昔の武器といまの武器の比較をするところでもっと詳しく述べよう。(I, 48, p. 279, a)

モンテーニュが1588年以後例の削除をした際、こちらの文には気付かず削除し忘れたとは考えられない。同じく1588年以後、彼はここに銃器と似た武器に関する文章を挿入しているからである。例の削除の施された版の読者が、銃器について詳しく述べた古今の武器比較論には出会わず、——なぜなら、「パルティア人の武器について」は銃器について詳しく述べていないから——その理由も知らされないまま、第II巻の最終章「子供が父親に似ることについて」に辿り着くと、次の文がその理由を暗に示す。

私の口述を筆記していた召使いは、この「エッセー」から勝手に数篇を盗ん

で大した戦利品を得たつもりでいた。だが私は、自分も損をしなかったように、彼も得をしなかったろうと思って自ら慰めている。(Ⅱ, 37, p.737, a)

ここには盗まれた原稿のひとつが何についてのものかは記されていないが、あの予告を気に止めていた読者には推定できるだろう。また、これら二章の題名も、「パルティア人の武器について」と「父の子供に対する愛情について」を暗示していないだろうか。さらに第Ⅱ巻第8章の終わりの方には上記の削除がなされたのと同じ1595年版で次のような増補がなされている。

私はここにあるとおりのこの子供に、自分が与えるものを、人が肉体から生まれる子供に与えるのと同じように、すっかり、最終的に、与えます……
(Ⅱ, 8, p. 383, c)

もちろん、この章で列挙された他の作家たちと同様、モンテーニュも自著を子供にみなし強く愛していることは、この文がなくても理解できる²⁶⁾。だが、ここ、第8章の終わりの方、「パルティア人の武器について」の直前で改めて言明するのは、上記の二つの遠くからの示唆とこれを介して、次の章に託した心情を読者にわからせようとするためではないだろうか。

※
※※

以上で『エッセー』における章同士の関係が、後年の相次ぐ増補によって目立たなくなる一方、きわめて意識的にだがさりげなく補強されていることが示されたと思う。思想的に重要性のない詳細・装飾・無秩序・銜学趣味と判断される増補も、ひとつひとつ、それが挿入されている章とその周辺の章との関係の補強という観点から考察されない限り、そのように簡単に片付けられるものではないだろう。その場合、モンテーニュの理想とする諸章のつながりは彼の文章表現の美学に従って、「弱く不注意な耳のために連結する言葉」ではなく、どこかの隅の目立たぬ言葉によって示そうとされており、時にほとんど理解できないほどまでになっていることは、本稿で扱った諸章が示しているとおりである。

また、このことから、プーレの指摘する「小さなばらばらの覚え書」が「生

活とおなじようにばらばらではあるが、かつまた、生活とおなじように、たがいに重なりあい、どうにかこうにか嵌りあって、ついには不連続にたいして「与えるにいたる」²⁷⁾「一種の連続のごときもの」が、単なる自然の結果ではなく、意図的な諸章のつながりと増補修正によるその補強とによって作り出されていることがわかるだろう。

さらに、近年『エッセー』の構成の数字を手掛りにした再検討がなされている²⁸⁾が、これとは別の角度から、すなわちセイス、メージェ両氏に続いて本稿でも一部にすぎないが指摘した、隣り合う章同士の関係とそれによって各章が持つ意味を見出してゆくことによって、長い間執筆年代順という配列の理由しか認められず、断章の寄せ集めと考えられていた『エッセー』の構成を見出すことも可能なのではないだろうか。その際、セイス、メージェ両氏によってすでに明らかにされている関係が大いに参考になるだろう。また、後者が指摘したように初版のテキスト、及び別の箇所への増補が諸章の関係を示していることや、あるいは、本稿で指摘したように同じ箇所への増補が諸章の関係を示していることを考慮に入れるのも役立つのではないかと思われる。

註

- 1) Pierre VILLEY, *Les Sources et l'évolution des «Essais» de Montaigne*, Hachette, 1908, t. I, pp. 400–406, t. II, pp. 491–535.
- 2) 寺迫正広, 「Essais における事例蒐集の意義」, 『フランス語フランス文学研究』No.39, 1981, pp. 1–10.
- 3) VILLEY, *op. cit.*, t. I, pp. 381–391.
- 4) もっとも, I, 25–26など若干の章についてはこれを認めている。
- 5) Richard SAYCE, «L'Ordre des Essais de Montaigne», in *Bibliothèque d'Humanisme et Renaissance*, No.18, 1956, pp. 7–22.
- 6) Marianne S. MEIJER, «L'ordre des Essais dans les deux premiers volumes», in *Montaigne et les «Essais» 1580–1980*, Champion-Slatkine, 1983, pp. 17–27.
- 7) Id. *ibid.*, p.26.
- 8) MONTAIGNE, *Essais*, in *Œuvres complètes*, textes établis par A.

THIBAUDET et M. RAT, *Bibl. de la Pléiade*, Gallimard, 1962. ローマ数字は巻, アラビア数字は章, a は1580年版, b は1588年版, c は1595年版を意味する。ただし, D. M. はMichel Eyquem de MONTAIGNE, *Essais*, reproduction photographique de l'édition originale de 1580 publiée par D. MARTIN, Slatkine- Champion, 1976. 引用は特に指示のない限り原二郎氏訳(岩波文庫)。傍点は引用者。

- 9) SAYCE, *op. cit.*, p. 19.
- 10) S. ドレスデン, 『ルネサンス精神史』, 高田勇訳, 平凡社, 1980, p. 223.
- 11) MEIJER, *op. cit.*, p. 27.
- 12) Cf. *Journal de voyage*, in MONTAIGNE, *Œuvres complètes*, p. 1229.
- 13) 原二郎氏の訳をもとにした拙訳。
- 14) «grossiers & ignorans», «delicatz & savans».
- 15) «communs et vulgaires», «singuliers et excellens».
- 16) «commune», «rare et extraordinaire».
- 17) «adoperio».
- 18) «couvrir» (I, 55, p. 301, a).
- 19) «sentir».
- 20) «Des senteurs».
- 21) «cervelle» (I, 57, p. 314, b).
- 22) «cerveau».
- 23) «cerveau» 及び «cervelle(s)» の『エッセー』における使用頻度はきわめて低く, リーク氏によれば前者が11例, 後者が13例である。
Cf. Roy E. LEAKE, *Concordance des «Essais» de Montaigne*, Droz, 1981, t. I, p. 201.
- 24) Cf. 「さてある人が, 私の先の一章〔I, 25〕を読んで, 先日, 私のところへやってきて, 子供の教育についてもう少し詳しく述べるべきだったと言われました。」(I, 26, p. 147. a); 「この二組〔I, 39で言及した哲学者たち〕の比較にはさらにもう一つの特徴がある。」(I, 40, p. 243, a, この文でこの章は始まる。)
- 25) 拙訳。
- 26) その他, I, 26の冒頭にもモンテーニュが自著を子供にみなしていること

を示す文章が見られる(I, 26, p. 144, a)。

- 27) Georges POULET, *Etudes sur le temps humain*, Plon, 1949, t. I, p.10.
(引用は山崎庸一郎氏の訳)
- 28) Cf. Michel BUTOR, *Essais sur les «Essais»*, Gallimard, 1968; MARTIN, *op. cit.*, pp. 1-44; 中村栄子, 「Essai «De l'amitié»の一節をめぐって—— *les Essais* の構成に関する一考察」, 『フランス語フランス文学研究』 No.17, pp. 8-14。